保育室が今より広くなった場合（2）　保育士の行動に生じる変化

○河野利津子（比治山大学短期大学部）　成田朋子（名古屋柳城短期大学）　川喜田昌代（玉成保育専門学校）
千葉武夫（聖和大学短期大学部）　西村重稀（仁愛女子短期大学）

０，１，２歳の保育室が今より広くなった場合に、自らの行動にどのような変化が生じると保育士が考えているのかを調べて、適切な保育室の面積を査定するのに役立つ資料を提供することを目的とする。

方法

調査対象　全国にある認可保育所の 10 分の１を調査対象とした。各園の主任か、０、１、２歳児の各部屋の責任者に調査票に解答してもらった。配布票数は2252票、回収票数は974票で回収率は42.4%であった。

材料　調査票は、保育所に在籍する０、１、２歳児全般について尋ねる調査票、０歳児の保育室について尋ねる調査票、１歳児の保育室について尋ねる調査票、２歳児の保育室について尋ねる調査票の４部構成とした。本研究の主な関心である「保育室が今より広くなったときに生じる変化」については、表１に示すような 18 項目に対して、「以下の文のようになる」「今と変わらない」「むしろ以下の文とは逆の結果になる」のいずれかを選んでもらった。

手続き　調査票は平成 20 年１月 24 日付けで、各保育所に送付した。各保育所では、主任か、０、１、２歳児の各部屋の責任者が、調査票に回答した。回収は、回収用封筒に封入の上、返信用封筒にて、研究代表者の所に郵送する形とした。返送の期日は平成 20 年２月 14 日とした。

結果と考察

各項目に対する回答について、３(年齢)×３(回答)のχ^2検定を行ったところ、５、７、16 の３項目で有意差があった（数値は表１参照)。「以下の文のようになる」の割合は、項目５では０歳児、項目７と 16 では２歳児が多かった。保育室の広さが与える影響には年齢による差があると言える。

表１は、年齢毎に２(設置主体)×３(回答)のχ^2検定を行い、いずれの年齢かで有意であった項目について、各回答の割合を示したものである。比較のために、有意でなかった年齢には色をつけず、数値のみを示した。有意であった項目数は、０歳児では有意な項目はなかったが、１歳児では８項目、２歳児では４項目が有意であった。部屋が広くなることによる保育士の行動の変化における設置主体の違いは、１歳児で大きいと考えられる。

数値を見ると、１歳児では、すべての項目で公立園の方が「以下の文のようになる」が多かった。２歳児では、「保育士同士の会話がしやすくなる」で私立園の「むしろ逆の結果になる」が多く、「玩具・遊具など物的環境を管理しやすい」で公立園の「むしろ逆の結果になる」が多かった。

本研究は、厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究（H19－政策－一般－017）（主任研究者民秋言）に基づく研究のデータを再分析したものである。

表１．保育室が今よりも広くなった場合に保育士の行動に生じる変化（%）

			０歳児			１歳児			２歳児		
			以下の文のようになる	変わらない	むしろ、逆になる	以下の文のようになる	変わらない	むしろ、逆になる	以下の文のようになる	変わらない	むしろ、逆になる
4	食事の援助がしやすい	公立	42.5	51.5	6.0	38.8	54.4	6.7	39.2	54.7	6.1
		私立	35.4	57.9	6.7	29.1	63.1	7.8	34.5	60.1	5.5
5	睡眠の援助がしやすい	公立	48.5	46.6	4.9	41.0	51.7	7.3	37.5	56.0	6.5
		私立	45.0	50.6	4.5	31.9	60.3	7.8	37.4	56.8	5.8
6	清潔の援助がしやすい	公立	31.1	63.3	5.7	31.2	63.0	5.9	28.1	64.9	7.0
		私立	24.6	68.9	6.4	20.5	72.0	7.5	22.6	70.4	7.0
7	着脱の援助がしやすい	公立	31.4	63.6	5.0	34.7	58.2	7.1	40.8	51.9	7.2
		私立	24.0	70.3	5.6	26.3	65.0	8.7	32.5	62.3	5.2
8	遊びの援助がしやすい	公立	51.7	40.4	7.9	54.1	37.1	8.8	51.5	40.7	7.8
		私立	51.3	39.8	8.9	43.2	45.8	11.0	50.3	44.6	5.1
10	保育士同士の会話がしやすい	公立	6.7	76.5	16.9	4.0	78.8	17.1	4.3	84.4	11.4
		私立	4.2	80.1	15.7	5.5	75.9	18.6	8.1	76.7	15.1
12	玩具・遊具など物的環境を管理しやすい	公立	53.2	34.8	12.0	51.7	37.0	11.3	52.9	35.0	12.1
		私立	54.0	34.8	11.1	48.4	41.8	9.8	51.9	41.2	6.9
13	安全管理をしやすい	公立	34.5	46.0	19.5	31.2	47.1	21.7	34.2	46.8	19.0
		私立	27.7	49.3	23.0	21.7	53.5	24.9	27.7	50.7	21.6
14	保育士のストレスがたまらない	公立	33.3	62.8	3.8	32.8	62.3	4.9	33.4	61.5	5.1
		私立	26.8	67.3	5.9	22.5	71.5	6.1	28.2	67.2	4.6
15	保育士が疲れにくくなる	公立	20.5	71.0	8.5	20.6	70.4	9.0	23.2	68.3	8.5
		私立	16.9	72.8	10.4	11.6	78.3	10.1	17.1	74.5	8.4
16	保育士の口調が柔らかくなる	公立	14.5	77.9	7.6	13.9	78.9	7.1	17.8	76.6	5.6
		私立	10.1	84.2	5.6	8.1	82.1	9.8	14.7	78.4	6.9
18	保育室以外で保育する機会が少なくなる	公立	24.2	71.2	4.6	23.5	72.8	3.7	28.3	68.0	3.7
		私立	20.9	75.1	4.0	19.2	76.1	4.7	17.3	78.1	4.6

保育室の広さが乳児の行動に及ぼす影響： ビデオ観察による検討

○森　俊之（仁愛大学）　清水益治（神戸女子大学）　佐藤直之（京都女子大学短期大学部）
河野利津子（比治山大学短期大学部）　水上彰子（富山福祉短期大学）　民秋　言（白梅学園大学）

現在、児童福祉施設最低基準によれば、乳児または満2歳に満たない幼児を入所させる保育所は、乳児室（1.65㎡以上）またはほふく室（3.3㎡以上）を設けることとなっている。一方で、こうした認可保育所とは別に、近年、地方自治体が独自に認証する保育施設も増加しており、こうした施設では、認可保育所よりも最低基準が比較的緩く設定されていることが多い。

空間の広さは、生活環境の大きな要因の一つである。たとえば、部屋の広さは生活者にとっての満足度に大きく影響することが示されている。また、幼児の発達という点では、園庭の面積や建物延べ面積が幼児の探索行動の発達に大きな影響を及ぼすという研究もある。

本研究では、保育室の広さが異なることにより、乳幼児の行動にどのような違いがみられるかを検討する。

方法

調査対象：6園の保育所（横浜市、富山市、福井市、倉敷市、広島市、熊本市に）に協力を依頼し、0歳児クラスと1歳児クラスを調査対象とした。

環境条件の設定：同じクラスにおいて、部屋に物を置いたり、一部屋で保育する乳幼児の数を調整したりすることで、子ども一人当たりの実質的な保育空間の広さを操作し、「3.3㎡条件」と「2.5㎡条件」の2つの条件を設定した。

手続き：行動の観察は、原則として、月曜日から金曜日までの1週間に特別な行事が含まれていない週の、火曜日から金曜日までの連続した4日間で行った。火曜日と木曜日にはふだんと同じ条件で保育をしてもらい、水曜日と金曜日に3.3㎡条件か2.5㎡条件のいずれかの条件で保育をしてもらった。保育士には、与えられた広さの環境において、できるだけ子どもにとって最善となることを意識しながら、自然な保育を心がけてもらうようお願いした。

ビデオ録画：保育室の天井にカメラ（防犯用CCDカメラ）を設置し、午前9時から午後3時頃までの6時間、保育の様子をビデオ撮影した。今回は、自由遊び時間（最初の10分間）の内容について分析した。

結果と考察

観察空間を1.5m四方の正方形に分割し、他の空間へ移動した場合を1単位の移動とみなし、観察時間の間に一人ひとりの子どもが何単位移動したかをカウントした。その結果、0歳児クラスでは3.3㎡条件と2.5㎡条件の間で統計的に有意な差は見られなかったが、1歳児クラスでは3.3㎡条件の方が2.5㎡条件よりも子どもの移動量が多く、統計的な有意差が認められた。

他の子どもとの接触の頻度を10秒単位の1-0サンプリング方式によりカウントした。その結果、0歳児クラスでは3.3㎡条件と2.5㎡条件の間で統計的に有意な差は見られなかったが、1歳児クラスでは2.5㎡条件の方が3.3㎡条件よりも子ども同士の接触量が多く、統計的な有意差が認められた。

子どもの姿勢や身体の状態を10秒間隔のポイントサンプリング方式により観察記録した。同様に、子どもの活動内容という観点からも観察記録した。1歳児では、姿勢／活動内容いずれの観点からも、空間の広さによる有意差は見られなかった。0歳児では、位置移動を伴わないその場での立位の状態が2.5㎡条件で有意に多く、ハイハイなどの形で移動することが3.3㎡条件で有意に多かった。姿勢のデータと活動内容のデータを照らし合わせて分析すると、0歳児で2.5㎡条件の方が体を動かしていることが多いという結果は、その場で立って上半身を動かしている場合や、うつ伏せの状態で体を動かしていることが多いことに由来するものであった。さまざまな点で、保育室の広さが異なることにより、子どもの行動に違いが見られた。

表　各データの条件間の比較

	0歳児クラス		1歳児クラス	
<移動と接触>	3.3㎡	2.5㎡	3.3㎡	2.5㎡
移動量	17.1	12.3	**26.7**	**18.3**
他児との接触頻度	5.3	7.8	**3.6**	**9.6**
<姿勢・状態>	3.3㎡	2.5㎡	3.3㎡	2.5㎡
仰向け	9.1	6.9	3.8	4.8
うつ伏せ	35.8	36.9	23.7	26.6
座っている	7.0	2.3	2.7	4.4
立っている	**24.3**	**40.5**	33.2	31.8
ハイハイで移動	**19.6**	**8.5**	25.8	21.9
二足歩行で移動	4.0	4.8	9.3	9.7
抱かれている	0.0	0.1	0.7	0.7
<活動内容>	3.3㎡	2.5㎡	3.3㎡	2.5㎡
何もしていない	2.2	0.7	1.25	0.87
何かを見ている	7.7	2.8	0.23	0.62
体を動かす	**41.8**	**62.3**	56.3	55.1
玩具で一人遊び	21.2	15.7	31.9	23.6
保育士と関わる	6.7	8.0	0.75	1.32
他児と関わる	11.0	5.7	7.81	10.6
制止される	9.3	5.0	1.74	7.92

※ゴシックは有意差あり

※本発表は、平成19年度厚生労働科学研究費補助金 政策科学総合研究事業「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究」のデータを再分析したものである。

子どもと保育士の保育中の歩数の分析

○清水益治（神戸女子大学）　佐藤直之（京都女子大学短期大学部）　成田朋子（名古屋柳城短期大学）
千葉武夫（聖和大学短期大学部）　吉岡眞知子（東大阪大学）　西村重稀（仁愛女子短期大学）

０歳児と１歳児、並びに、これらの年齢を担当する保育士の保育中の歩数を測定した結果を報告する。

方法

調査対象　A保育園のいちご組（０歳児）19人（男児13人、女児６人）とその組の担当保育士７人、メロン組（１歳児）19人（男児11人、女児８人）とその組の担当保育士５人を調査対象とした。

材料　万歩計としてはコナミスポーツ＆ライフのe-walkeylife 2（型式HAF17-JA）を用いた。この機種を選んだのは、次の３つの理由による。①０歳児や１歳児につけるのに比較的小型（寸法 30W×70D×14.6H）で計量（27ｇ）である。②歩数だけでなく、走数も記録できる。③専用ソフト（健身計画２）を用いることで、時間ごとに分析ができる。

手続き　平成20年３月17日（月）から３月19日（水）の３日間を調査日とした。子どもについては、３日間とも登園から昼食までを調査時間とした（午睡の妨げになるため）。保育士については、３日間の勤務時間中を調査時間とした。

保育の流れは、０歳児・１歳児共に７時30分から順次登園、９時30分からおやつ、10時から主活動、11時頃から食事であった（１歳児は11時10分から食事）。

子どもへの万歩計の装着は、担当保育士が行った。子どもが順次登園し、担当保育士が子どもの衣服の調節をする際に、子どものズボンの背面の上端にクリップでとめ、万歩計はズボンのポケットに入れてもらった。万歩計は、登園時から午前11時まで装着しつづけてもらい、食事の時間に順次、取り外してもらった。保育士については、勤務につくのと同時に万歩計を装着し、勤務終了後に取り外してもらった。
このサイクルを３日間くり返してもらった。

結果と考察

図１は０歳児、図２は１歳児の３日間の子どもの平均歩数を時間別に示したものである。０歳児は８時～９時、９時～10時、10時～11時、11時～12時の４区分、１歳児は９時～10時、10時～11時、11時～12時、12時～13時の４区分としたのは、０歳児は８時過ぎから登園した子どもが多く、昼食の時間が早かったから、１歳児は９時前後に登園した子どもが多く、昼食の時間が少し遅かったからである。

先ず２つの図を比較した。縦軸に注目すると１歳児の歩数の方が多いことが分かる。どちらも10時～11時に平均歩数が多く、11時～12時にそれが著しく減少しているが、これは昼食の時間が関係するためであろう。

図３は０歳児と１歳児の担当保育士の平均歩数を示したものである（８時～９時と16時以降の時間帯では、早出、遅出などの勤務形態により、調査人数は少なくなっている）。どちらの年齢でも10時～11時に最も歩数が多く、14時～15時が少なくなっている。午前の遊びの時間帯と午睡の時間帯に対応するものであろう。

次に０歳児と１歳児を比較した。10時～11時と18時～19時では１歳児担当の保育士の歩数の方が、８時～９時と15時～16時では逆に０歳児担当の保育士の歩数が多かったが、全体としてみると、それほど大きな違いはない。すなわち、子どもでは１歳児の歩数の方が多かったが、保育士では１歳児の担当の方が歩数が多いとは言えない。

図１、図２に示した子どもの歩数を参照すると、保育士の歩数と子どもの歩数の間に、相関関係があることが示唆される。すなわち、子どもが歩いた歩数が多い時間帯は、保育士も歩く歩数が多い時間帯であることが示唆される

本研究は、厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究（H19－政策－一般－017）（主任研究者民秋言）に基づくものである。

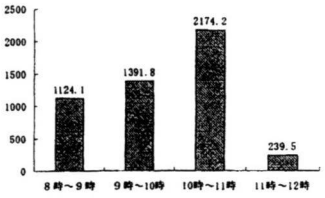

図１．０歳児の歩数

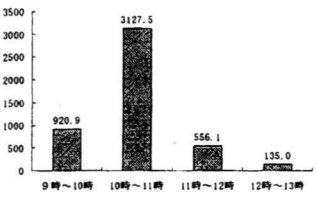

図２．１歳児の歩数

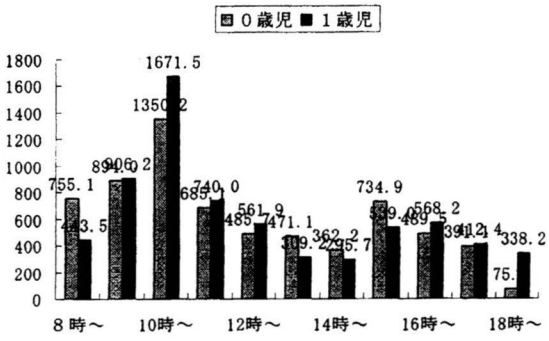

図３．保育士の歩数

１・２歳児クラス担当の保育士が忙しい・保育士不足であると感じる活動

吉岡眞知子（東大阪大学）　水上彰子（富山福祉短期大学）　川喜田昌代（玉成保育専門学校）
千葉武夫（聖和短期大学）　清水益治（帝塚山大学）　西村重稀（仁愛大学）

キーワード：１・２歳児、忙しい活動、保育士不足

目的

１歳児クラスと２歳児クラスを担当する保育士に、忙しい活動と保育士不足を感じる活動を尋ねて、各年齢クラスに適正な保育士の数を判断する基礎資料を得ることを目的とする。

方法

調査対象保育所　全国にある認可保育所の 10 分の１を調査対象とした。調査対象の選定には、財団法人厚生統計協会による「平成 17 年版　社会福祉施設等名簿（CD－ROM）」を用いた。この名簿で、10 番目毎に掲載されている保育所を選ぶこととした。調査票を配布した保育所の数は 2234 カ所であった。

材料　各年齢クラスを担当する保育士用の調査票は、どちらも次のような内容を尋ねる項目で構成されていた。①忙しいと感じる活動、②保育士がもっと多い方が良いと感じる活動、③保育者の数が今より多くなると仮定した場合、子どもや保育士の行動に生じる変化、④保育士がもっと少ない方が良いと感じる活動、⑤保育者の数が今より少なくなると仮定した場合、子どもや保育士の行動に生じる変化、⑥当該年齢を担当する保育士の数に対する考え、⑦４月頃の当該年齢を担当する保育士の数に対する考え、⑧様々な業務に費やす時間、⑨人的環境で工夫している点、⑩フェイスシート。本研究では、このうち①と②を分析の対象とした。

手続き　各保育所で、１、２歳児クラスを担当する保育士各３名に、業務について尋ねる調査票を配布してもらった。配布にあたっては、クラスリーダーとサブを含めて３名を各保育所で選んでもらった。回収は、回答者が調査票を回収用封筒に封入した上で、各保育所から一括して、返信用封筒にて、研究代表者の所に郵送する形とした。調査票の配布は平成 20 年 11 月 28 日付け、返送の期日は平成 20 年 12 月 19 日とした。

結果と考察

827 の保育所から調査票が回収された。回収率は、36.5%であった。回収された調査票を設置主体別に見ると、公立園が 50.9%、私立園が 44.7%、無回答が 4.4%であった。

１歳児クラスを担当する保育士に関しては、1955 票の調査票が回収された。役割分担別の内訳はリーダーが 38.7%、サブリーダーが 18.3%、その他が 37.7%であり、無回答が 5.1%あった。２歳児クラスを担当する保育士に関しては、1935 票の調査票が回収された。役割分担別の内訳は同じ順に 39.3%、21.2%、34.3%、5.3%あった。

（１）忙しい活動

「１日のうちで、あなたが特に「忙しい」と感じる活動はどれですか。３つ選んでください。」と尋ね、指定通り３つが選ばれている票だけを分析対象とした。分析対象は１歳児では公立保育園の保育士が 828 名、私立保育園の保育士が 823 名、２歳児では同じ順に 813 名と 782 名であった。各活動が選ばれた場合に１点、選ばれなかった場合を０点として平均値を算出した。この値を 100 倍したものが、被選択率となる。表１は、１歳児と２歳児の担当保育士が忙しいと判断した活動の被選択率を公私立園別に示したものである。２（年齢）×２（公私立）の分散分析の結果を表の最右列に示す。

公私立の主効果が有意であった活動は、８つであった。このうち公立園の方が私立園よりも選ばれた割合が高かった活動は、「６．食事（授乳を含む）の援助」、「９．排泄の援助」の２つであった。反対に私立園の方が公立園よりも選ばれた割合が高かった活動は、「１．登園（所）前の掃除と片付け」「２．登園(所）時の子ども対応」「４．午後の遊び」「14．降園(所）時の子ども対応」「15．降園(所)時の保護者対応」「16．保育中の掃除・片付け」であった。私立園の保育士の方は、登園時や降園時が忙しいと感じているといえる。

公立園の方が選ばれた割合が高かった「６．食事（授乳を含む）の援助」、「９．排泄の援助」の２つの活動は、年齢の主効果でも、１歳児担当の保育士の方が２歳児担当の保育士よりも選んだ割合が高かったことは興味深い。

（２）保育士不足を感じる活動

「あなたが、保育者がもっと多いほうがよいと感じ

る活動はありますか。」の問いに対して「はい」と答えた保育士（1歳児の公立園の保育士は774名、私立園の保育士は686名、2歳児は同じ順に686名と520名）に、「そのように感じる活動のすべてに○をつけてください（複数回答可）。」として、表1と同じ活動を示した。表2は、1歳児と2歳児の担当保育士が保育士不足を感じると判断した業務の被選択率を公私立園別に示したものである。2（年齢）×2（公私立）の分散分析の結果も表の最右列に示した。

10の業務で公私立園の主効果が有意であった。公立園の保育士の方が私立園の保育士よりも選んだ割合が高かった業務は、「午前の遊び」「食事（授乳を含む）の援助」「おやつの援助」「午睡の援助」「排泄の援助」「着脱の援助」「清潔（沐浴、清拭等)面の援助」および「連絡帳の記入など記録」の8つであった。一方、私立園の保育士の方が公立園の保育士よりも選んだ割合が高かった業務は、「降園(所）時の子ども対応」と「降園(所)時の保護者対応」の2つであった。

公立園の保育士が選んだ割合が高かった業務は、養護面のかかわりのすべてを含んでいた。公立園の保育士はこれらの業務をよりていねいにする必要があると考えているのであろう。一方、私立園の保育士が選んだ割合が高かった業務は、降園(所）時のかかわりであった。私立園の保育士はこれらの業務を充実させたいと望んでいると思われる。

表1．年齢別、公私立園別にみた「忙しい活動」の選択率（%）

	1歳児		2歳児		分散分析結果
	公立	私立	公立	私立	
1．登園（所）前の掃除・片づけ	1.2	2.6	1.5	2.4	私立＞公立
2．登園（所）時の子ども対応	15.1	19.2	23.9	25.7	2歳＞1歳、私立＞公立
3．登園（所）時の保護者対応	8.6	7.8	10.7	11.1	2歳＞1歳
4．午前の遊び	11.1	10.6	13.9	15.0	2歳＞1歳
5．午後の遊び	1.1	4.1	1.7	3.2	私立＞公立
6．食事（授乳を含む）の援助	80.2	71.8	63.5	53.3	1歳＞2歳、公立＞私立
7．おやつの援助	4.2	5.3	2.3	2.3	1歳＞2歳
8．午睡の援助	10.9	8.5	12.7	11.3	2歳＞1歳
9．排泄の援助	59.3	52.9	41.5	34.5	1歳＞2歳、公立＞私立
10．着脱の援助	38.3	37.7	42.6	39.8	
11．清潔（沐浴、清拭等）面の援助	10.5	8.7	5.4	7.5	公立でのみ1歳＞2歳
12．延長保育への引き継ぎ	1.9	2.9	3.6	4.5	2歳＞1歳
13．連絡帳の記入など記録	22.9	21.3	30.1	32.0	2歳＞1歳
14．降園（所）時の子ども対応	4.2	8.4	6.9	8.3	私立＞公立
15．降園（所）時の保護者対応	8.6	12.2	13.7	18.2	2歳＞1歳、私立＞公立
16．保育中の掃除・片づけ	17.1	19.2	19.3	23.1	2歳＞1歳、私立＞公立
17．降園（所）後の掃除・片づけ	1.4	1.6	2.3	2.6	
18．その他	3.3	5.3	4.6	5.2	

表2．年齢別、公私立園別にみた保育士不足を感じる業務の選択率（%）

	1歳児		2歳児		分散分析結果
	公立	私立	公立	私立	
1．登園（所）前の掃除・片づけ	3.1	3.9	3.8	3.5	
2．登園（所）時の子ども対応	23.0	25.9	29.7	27.7	2歳＞1歳
3．登園（所）時の保護者対応	16.4	13.6	19.2	18.1	2歳＞1歳
4．午前の遊び	30.7	27.6	32.8	24.2	公立＞私立
5．午後の遊び	12.9	15.6	9.2	9.6	1歳＞2歳
6．食事（授乳を含む）の援助	74.4	62.0	57.9	43.3	1歳＞2歳、公立>私立
7．おやつの援助	10.6	8.9	6.3	3.7	1歳＞2歳、公立>私立
8．午睡の援助	23.0	14.7	20.7	16.7	公立＞私立
9．排泄の援助	57.2	48.7	43.9	30.0	1歳＞2歳、公立>私立
10．着脱の援助	47.3	42.4	43.6	34.0	1歳＞2歳、公立>私立
11．清潔（沐浴、清拭等）面の援助	20.4	18.4	18.1	13.3	1歳＞2歳、公立>私立
12．延長保育への引き継ぎ	5.9	7.7	8.0	6.0	
13．連絡帳の記入など記録	19.0	14.3	24.3	19.6	2歳＞1歳、公立＞私立
14．降園（所）時の子ども対応	12.7	18.1	14.1	18.3	私立>公立
15．降園（所）時の保護者対応	15.9	18.5	21.4	25.0	2歳＞1歳、私立＞公立
16．保育中の掃除・片づけ	28.3	25.5	26.1	24.0	
17．降園（所）後の掃除・片づけ	5.4	5.0	9.0	6.0	2歳＞1歳
18．その他	6.5	5.7	9.8	9.0	2歳＞1歳

本研究は、厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究（主任研究者　民秋言)」に基づくものである。

子どもと保育士の数の割合の変化が子どもの行動に及ぼす影響

清水益治（帝塚山大学）　河野利津子（比治山大学）　森　俊之（仁愛大学）
成田朋子（名古屋柳城短期大学）　鈴木岩雄（名古屋芸術大学）　民秋　言（白梅学園大学）

キーワード：子どもと保育士の数の割合、子どもの行動への影響

目的

1歳児クラスと2歳児クラスを担当する保育士に、保育士の数が今より多くなった場合と少なくなった場合に、子どもの行動にどのような影響がでると思うかを調べることで、各年齢クラスに適正な保育士の数を判断する基礎資料を得ることを目的とする。

方法

調査対象保育所　全国にある認可保育所の 10 分の1を調査対象とした。調査対象の選定には、財団法人厚生統計協会による「平成17年版　社会福祉施設等名簿（CD－ROM）」を用いた。この名簿で、10 番目毎に掲載されている保育所を選ぶこととした。調査票を配布した保育所の数は2234 カ所であった。

材料　各年齢クラスを担当する保育士用の調査票は、どちらも同じ内容を尋ねる項目で構成されていた。本研究の関心である子どもと保育士の数の割合の変化が子どもの行動に及ぼす影響を調べる項目では、「保育者の数が今より多くなるとすれば（今より少なくなるとすれば）、子どもや保育士の行動にどのような変化が生じると思いますか。」として、子どもに関する内容の15 項目、保育士に関する内容の 20 項目について、「今よりも以下の文のようになると思われる」、「今と変わらないと思われる」、「むしろ以下の文とは逆の結果となると思われる」の3つから選んでもらった。。

手続き　各保育所で、1、2歳児クラスを担当する保育士各3名に、業務について尋ねる調査票を配布してもらった。配布にあたっては、クラスリーダーとサブを含めて3名を各保育所で選んでもらった。回収は、回答者が調査票を回収用封筒に封入した上で、各保育所から一括して、返信用封筒にて、研究代表者の所に郵送する形とした。調査票の配布は平成 20 年 11 月 28 日付け、返送の期日は平成 20 年 12 月 19 日とした。

結果と考察

827 の保育所から調査票が回収された。回収率は、36.5%であった。回収された調査票を設置主体別に見ると、公立園が 50.9%、私立園が 44.7%、無回答が 4.4%であった。

1歳児クラスを担当する保育士に関しては、1955 票の調査票が回収された。役割分担別の内訳はリーダーが 38.7%、サブリーダーが 18.3%、その他が 37.7%であり、無回答が 5.1%あった。2歳児クラスを担当する保育士に関しては、1935 票の調査票が回収された。役割分担別の内訳は同じ順に 39.3%、21.2%、34.3%、5.3%あった。

表1の左は、「今より多くなるとすれば」について、各選択肢が選ばれた割合を示したものである。2（年齢）×2（公私立）×3（選択肢）の χ^2 検定の結果が有意であったところには、年齢ごとに調べた下位検定の結果を示した。「15. 保育士への関わりを多く求める」では有意差はなかった。「11. 怪我が多くなる」「13. 子ども同士のかかわりが多くなる」と「14. 子どものかみつきが少なくなる」の3項目では、1歳児では差がなく、2歳児でのみ有意差がみられた。「11. 怪我が多くなる」では、「変わらない」が選ばれた割合が、私立園の方が公立園よりも大きかった。「13. 子ども同士のかかわりが多くなる」と「14. 子どものかみつきが少なくなる」では、「文のようになる」が選ばれた割合が、公立園の方が私立園よりも大きかった。　他の項目では、1歳児と2歳児はともに、「文のようになる」が選ばれた割合は、公立園の方が私立園よりも大きく、「変わらない」が選ばれた割合は、逆に私立園の方が公立園よりも大きかった。

多くの項目で「変わらない」は私立園の保育士、「文のようになる」は公立園の保育士が、より多く選んだことは興味深い。公立園の保育士の方が私立園の保育士よりも、保育士の数が多くなれば、子どもの行動によい影響があると感じているようである。

怪我の数、子ども同士のかかわりの量、子どものかみつきの数では、公立園と私立園の差は、特に2歳児で顕著であった。1歳児では年齢が低いため、それほど大きな差が出ないのかも知れない。しかしながらこの結果も、現行の児童福祉施設最低基準には疑問を投げかける。すなわち、「1歳児と2歳児は、ともに子どもの数：保育士の数の比が6：1」という基準に疑問

を投げかける。１歳児と２歳児では発達的に異なる点を考慮した基準作りが必要であることが示唆される。

表１の右は「今より少なくなるとすれば」について、各選択肢が選ばれた割合を示したものである。先と同じ分析をしたところ、すべての項目で有意差がみられた。数値を見ると、２つの例外を除くすべての項目で、１歳児、２歳児ともに、公立園の方が私立園よりも、「逆の結果となる」が選ばれた割合が高く、「変わらない」が少なかった。　一方、「11. 怪我が多くなる」と「14. 子どものかみつきが少なくなる」では、１歳児において、公立園の方が私立園よりも、「変わらない」が少なく、「逆の結果となる」ではそれほど大きな差はなかった。

公立園の方が私立園よりも、「変わらない」が選ばれた割合が少ないという結果は、公立園の方が私立園よりも保育士の数が少なくなることの子どもの行動に対する影響に敏感であることを示唆している。特に公立園で、人的資源が乏しいことの現れかも知れない。

表１．年齢別、公私立園別にみた保育士の数が変化することの子どもに対する影響（%）

	保育者の数が		今より多くなるとすれば				今より少なくなるとすれば			
			文のようになる	変わらない	逆の結果となる	検定結果	文のようになる	変わらない	逆の結果となる	検定結果
1. 食事を楽しむことができる	1歳児	公立	75.2	22.6	2.2	**	1.1	13.1	85.9	**
		私立	66.8	29.5	3.6		1.3	19.5	79.2	
	2歳児	公立	74.8	23.2	2.1	**	1.0	18.7	80.3	**
		私立	69.1	28.0	3.0		1.3	30.7	68.0	
2. 睡眠など適切な休息をとれる	1歳児	公立	48.9	49.8	1.3	**	1.1	26.3	72.6	**
		私立	38.3	61.1	0.6		1.3	39.3	59.4	
	2歳児	公立	52.3	46.3	1.4	**	1.4	26.6	71.9	**
		私立	39.1	59.9	1.1		0.9	43.4	55.7	
3. 清潔を保つ行動が増える	1歳児	公立	71.7	27.4	1.0	**	1.4	16.3	82.3	**
		私立	63.5	35.7	0.8		1.2	24.5	74.3	
	2歳児	公立	71.8	27.8	0.4	**	1.3	16.5	82.2	**
		私立	65.1	34.3	0.7		1.2	27.9	70.9	
4. 身体的活動がしやすい	1歳児	公立	78.1	20.5	1.4	**	1.4	13.8	84.8	**
		私立	70.6	28.2	1.3		1.8	22.7	75.5	
	2歳児	公立	73.4	25.6	1.0	**	1.4	15.6	83.0	**
		私立	64.6	34.2	1.2		1.6	27.0	71.5	
5. 聞く見る触れるなど感覚を使う機会が増える	1歳児	公立	77.5	21.4	1.1	**	1.2	18.4	80.4	**
		私立	70.5	28.8	0.8		1.1	31.0	68.0	
	2歳児	公立	72.0	27.3	0.8	**	2.0	22.2	75.8	**
		私立	64.2	34.8	1.0		1.3	34.4	64.3	
6. 言葉（喃語を含む）を発しやすくなる	1歳児	公立	60.7	37.8	1.5	*	1.4	31.2	67.3	**
		私立	55.4	43.7	1.0		1.4	42.5	56.1	
	2歳児	公立	61.6	37.5	1.0	**	1.5	31.3	67.2	**
		私立	52.7	46.5	0.8		1.0	47.1	51.9	
7. 周囲の人やものに興味・関心をもつ	1歳児	公立	59.6	39.3	1.1	**	1.1	39.3	59.7	**
		私立	52.0	47.6	0.4		1.3	51.2	47.5	
	2歳児	公立	60.5	38.5	1.0	**	2.1	36.2	61.7	**
		私立	50.1	49.2	0.8		2.0	53.7	44.3	
8. 情緒が安定する	1歳児	公立	81.8	16.7	1.5	**	1.2	9.1	89.7	**
		私立	74.0	23.9	2.0		1.5	17.6	80.9	
	2歳児	公立	78.5	19.9	1.6	**	1.6	13.5	84.9	**
		私立	69.4	29.6	1.0		1.2	22.2	76.6	
9. 機嫌がよくなる	1歳児	公立	64.5	34.0	1.5	**	1.0	17.3	81.7	**
		私立	53.4	45.6	1.1		1.2	28.8	70.0	
	2歳児	公立	62.4	36.8	0.9	**	1.5	21.7	76.8	**
		私立	46.0	52.7	1.3		0.8	36.8	62.5	
10. 集中して遊ぶようになる	1歳児	公立	56.2	41.1	2.7	**	1.8	30.0	68.3	**
		私立	43.0	54.1	3.0		3.7	42.5	53.9	
	2歳児	公立	52.5	44.9	2.6	**	2.4	32.3	65.2	**
		私立	36.0	60.6	3.4		2.6	48.4	49.1	
11. 怪我が多くなる	1歳児	公立	3.9	20.8	75.3		70.2	9.1	20.7	*
		私立	5.2	24.2	70.6		68.8	13.1	18.1	
	2歳児	公立	4.7	21.7	73.6	**	66.2	13.1	20.7	*
		私立	2.8	27.6	69.6		66.7	16.8	16.5	
12. 子どもが疲れにくくなる	1歳児	公立	18.2	75.0	6.8	**	6.0	46.9	47.1	**
		私立	11.5	81.8	6.8		6.8	61.3	32.0	
	2歳児	公立	16.1	78.2	5.7	**	5.4	52.2	42.4	**
		私立	8.3	85.4	6.4		5.9	65.4	28.7	
13. 子ども同士のかかわりが多くなる	1歳児	公立	30.2	58.3	11.5		12.1	46.6	41.3	**
		私立	26.2	62.1	11.7		15.9	53.8	30.3	
	2歳児	公立	30.8	58.0	11.2	**	12.5	47.8	39.7	**
		私立	22.0	61.0	16.9		19.6	55.5	24.9	
14. 子どものかみつきが少なくなる	1歳児	公立	73.6	22.9	3.5		10.0	13.5	76.5	**
		私立	68.7	27.7	3.6		7.3	18.7	74.0	
	2歳児	公立	69.2	28.1	2.7	**	7.3	18.7	74.0	**
		私立	62.0	34.0	4.1		7.8	26.1	66.1	
15. 保育士への関わりを多く求める	1歳児	公立	53.3	39.3	7.4		45.4	24.0	30.6	**
		私立	50.7	42.8	6.5		40.9	33.1	26.0	
	2歳児	公立	51.0	42.8	6.2		42.9	26.6	30.5	**
		私立	52.4	42.1	5.5		40.0	35.0	25.0	

＊ p<.05、＊＊ p<.01

本研究は、厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究（主任研究者　民秋言）」に基づくものである。

子どもと保育士の数の割合の変化が保育士の行動に及ぼす影響

成田朋子（名古屋柳城短期大学）　鈴木岩雄（名古屋芸術大学）　森　俊之（仁愛大学）
河野利津子（比治山大学）　清水益治（帝塚山大学）　民秋　言（白梅学園大学）

キーワード：子どもと保育士の数の割合、保育士の行動への影響

目的

1歳児クラスと2歳児クラスを担当する保育士に、保育士の数が今より多くなった場合と少なくなった場合に、保育士の行動にどのような影響がでると思うかを調べることで、各年齢クラスに適正な保育士の数を判断する基礎資料を得ることを目的とする。

方法

調査対象保育所　全国にある認可保育所の 10 分の1を調査対象とした。調査対象の選定には、財団法人厚生統計協会による「平成17年版　社会福祉施設等名簿（CD－ROM）」を用いた。この名簿で、10 番目毎に掲載されている保育所を選ぶこととした。調査票を配布した保育所の数は 2234 カ所であった。

材料　各年齢クラスを担当する保育士用の調査票は、どちらも同じ内容を尋ねる項目で構成されていた。本研究の関心である子どもと保育士の数の割合の変化が子どもの行動に及ぼす影響を調べる項目では、「保育者の数が今より多くなるとすれば（今より少なくなるとすれば）、子どもや保育士の行動にどのような変化が生じると思いますか。」として、子どもに関する内容の15 項目、保育士に関する内容の 20 項目について、「今よりも以下の文のようになると思われる」、「今と変わらないと思われる」、「むしろ以下の文とは逆の結果となると思われる」の3つから選んでもらった。。

手続き　各保育所で、1、2歳児クラスを担当する保育士各3名に、業務について尋ねる調査票を配布してもらった。配布にあたっては、クラスリーダーとサブを含めて3名を各保育所で選んでもらった。回収は、回答者が調査票を回収用封筒に封入した上で、各保育所から一括して、返信用封筒にて、研究代表者の所に郵送する形とした。調査票の配布は平成 20 年 11 月 28 日付け、返送の期日は平成 20 年 12 月 19 日とした。

結果と考察

827 の保育所から調査票が回収された。回収率は、36.5%であった。回収された調査票を設置主体別に見ると、公立園が 50.9%、私立園が 44.7%、無回答が 4.4%であった。

1歳児クラスを担当する保育士に関しては、1955 票の調査票が回収された。役割分担別の内訳はリーダーが 38.7%、サブリーダーが 18.3%、その他が 37.7%であり、無回答が 5.1%あった。2歳児クラスを担当する保育士に関しては、1935 票の調査票が回収された。役割分担別の内訳は同じ順に 39.3%、21.2%、34.3%、5.3%あった。

表2の左は、「今より多くなるとすれば」について各選択肢が選ばれた割合を示したものである。2（年齢）×2（公私立）×3（選択肢）のχ^2検定の結果が有意であったところには、年齢ごとに調べた下位検定の結果を示した。「14. 保育士のストレスがたまらない」と「15. 保育士が疲れにくくなる」では1歳児で有意差はなく、「18. 保育の準備がしやすい」では2歳児で有意差はなかったが、他はすべての項目で1歳児と2歳児でともに有意差がみられた。数値を見ると、いずれの項目でも「文のようになる」が選ばれた割合は、公立園の方が私立園よりも大きく、「変わらない」が選ばれた割合は、逆に私立園の方が公立園よりも大きかった。

これらの結果は、公立園の保育士の方が私立園の保育士よりも、保育士の数が今より多くなると、保育がしやすくなると答えている割合が高いことを示している。公立園の方が私立園よりも、人的環境、特に保育士の数という点では苦しい現状があるのかも知れない。

表1の右は、「今より少なくなるとすれば」について、各選択肢が選ばれた割合を示したものである。同様の分析を行ったところ、「7. 衣服の着脱がしやすい」では有意差はなかった。数値を見ると、「逆の結果となる」がほぼ9割以上であり、天井効果によって差がなかったことがうかがえる。「3. 排泄の援助がしやすい」「4. 食事の援助がしやすい」および「13. 安全管理をしやすい」では1歳児では有意な差がなく、2歳児でのみ有意な差が見られた。数値を見ると、「3. 排泄の援助がしやすい」と「4. 食事の援助がしやすい」については、天井効果がうかがえた。

他のすべての項目では、1歳児と2歳児はともに、

公私立園の差が有意であった。数値を見ると、公立園の方が私立園よりも、「逆の結果となる」が多く、「変わらない」が少なかった。

子どもに対する影響と同様に、公立園の方が私立園よりも、「変わらない」が選ばれた割合が少ないという結果は、公立園の方が私立園よりも保育士の数が少なくなることの保育士の行動に対する影響に敏感であることを示唆している。仕事のしやすさに対して、公立園の保育士の方が私立園の保育士よりも大きく考えていのかも知れない。

表１．年齢別、公私立園別にみた保育士の数が変化することの子どもに対する影響（%）

保育者の数が			今より多くなるとすれば				今より少なくなるとすれば			
			文のようになる	変わらない	逆の結果となる	検定結果	文のようになる	変わらない	逆の結果となる	検定結果
1. 健康状態の把握がしやすい	1歳児	公立	75.2	22.6	2.2	**	1.9	16.5	81.6	**
		私立	66.8	29.5	3.6		2.4	23.2	74.5	
	2歳児	公立	74.8	23.2	2.1	*	2.5	15.6	81.9	**
		私立	69.1	28.0	3.0		3.0	23.6	73.4	
2. スキンシップをとりやすい	1歳児	公立	88.4	9.8	1.8	**	2.1	8.0	89.9	**
		私立	79.0	19.2	1.8		2.4	15.7	81.9	
	2歳児	公立	85.9	12.1	2.1	**	2.9	10.8	86.4	**
		私立	78.0	20.2	1.8		2.7	19.0	78.3	
3. 排泄の援助がしやすい	1歳児	公立	92.2	6.4	1.4	**	1.2	4.7	94.1	
		私立	87.7	10.7	1.6		1.8	5.6	92.6	
	2歳児	公立	87.1	12.2	0.6	**	1.6	7.0	91.3	**
		私立	80.4	18.6	1.0		1.2	12.0	86.8	
4. 食事の援助がしやすい	1歳児	公立	94.1	4.5	1.4	**	1.2	3.8	95.0	
		私立	88.3	10.2	1.6		1.7	5.2	93.1	
	2歳児	公立	87.3	11.6	1.2	**	1.4	6.4	92.2	*
		私立	81.3	17.9	0.8		1.6	9.7	88.8	
5. 睡眠の援助がしやすい	1歳児	公立	81.9	16.9	1.3	**	1.1	10.2	88.7	**
		私立	71.6	27.3	1.2		1.3	17.6	81.1	
	2歳児	公立	78.7	19.4	1.8	**	1.4	11.4	87.2	**
		私立	72.6	26.6	0.9		1.4	18.9	79.7	
6. 清潔の援助がしやすい	1歳児	公立	86.5	12.4	1.1	**	1.1	8.6	90.3	**
		私立	79.9	19.0	1.1		1.3	13.3	85.4	
	2歳児	公立	83.5	16.0	0.5	*	1.4	9.8	88.8	*
		私立	78.5	20.7	0.8		1.6	14.2	84.2	
7. 着脱の援助がしやすい	1歳児	公立	90.9	7.9	1.3	**	1.2	5.3	93.5	
		私立	86.0	12.8	1.3		1.5	7.3	91.2	
	2歳児	公立	87.6	11.3	1.1	**	1.8	6.9	91.3	
		私立	81.3	17.5	1.2		1.8	9.8	88.4	
8. 遊びの援助がしやすい	1歳児	公立	86.6	11.9	1.5	**	1.2	8.3	90.5	**
		私立	81.4	17.4	1.2		1.6	12.9	85.5	
	2歳児	公立	83.4	15.5	1.2	**	1.8	9.3	88.9	**
		私立	76.4	23.0	0.7		1.3	16.0	82.7	
9. 言葉かけがしやすい	1歳児	公立	66.7	31.1	2.2	**	2.1	19.9	78.0	**
		私立	55.2	43.7	1.2		2.4	31.1	66.6	
	2歳児	公立	68.4	29.3	2.4	**	2.8	20.4	76.9	**
		私立	54.0	44.5	1.5		1.9	33.0	65.1	
10. 保育士同士の会話がしやすい	1歳児	公立	26.4	65.3	8.3	*	4.1	46.4	49.5	**
		私立	20.6	69.8	9.6		6.1	54.7	39.3	
	2歳児	公立	27.9	62.3	9.7	**	5.5	43.4	51.1	**
		私立	19.3	69.7	11.0		6.2	54.9	38.9	
11. 温度湿度の管理がしやすい	1歳児	公立	34.1	64.5	1.4	**	1.2	47.8	51.0	**
		私立	26.0	72.9	1.1		1.0	59.4	39.7	
	2歳児	公立	34.2	64.5	1.3	**	1.3	49.8	48.9	**
		私立	24.0	75.2	0.8		0.6	59.3	40.2	
12. 玩具・遊具など物的環境を管理しやすい	1歳児	公立	71.8	27.0	1.2	**	1.0	21.8	77.2	**
		私立	64.2	34.5	1.3		1.5	29.1	69.4	
	2歳児	公立	70.4	28.2	1.4	**	1.3	20.8	77.9	**
		私立	63.3	36.2	0.4		1.1	30.4	68.5	
13. 安全管理をしやすい	1歳児	公立	83.5	15.6	0.9	*	1.4	13.2	85.3	
		私立	78.8	19.6	1.6		2.0	14.6	83.4	
	2歳児	公立	83.8	14.9	1.3	*	1.7	12.6	85.7	*
		私立	79.3	19.9	0.8		1.5	17.7	80.9	
14. 保育士のストレスがたまらない	1歳児	公立	41.5	51.1	7.4		4.6	25.2	70.2	**
		私立	38.5	53.9	7.6		3.5	33.8	62.8	
	2歳児	公立	42.0	49.7	8.3	**	4.0	26.8	69.3	**
		私立	30.3	62.0	7.7		5.1	37.2	57.6	
15. 保育士が疲れにくくなる	1歳児	公立	53.8	42.9	3.2		4.6	16.2	79.2	**
		私立	48.4	47.6	4.1		4.0	23.8	72.2	
	2歳児	公立	52.2	43.3	4.6	**	3.9	21.6	74.5	**
		私立	41.6	54.6	3.9		4.3	28.5	67.2	
16. 保育士の口調が柔らかくなる	1歳児	公立	44.9	53.6	1.5	*	1.9	29.4	68.8	**
		私立	39.2	59.7	1.1		1.6	39.2	59.2	
	2歳児	公立	44.4	53.7	1.8	**	2.2	30.8	67.0	**
		私立	32.1	66.5	1.4		1.8	44.3	53.9	
17. 保護者への対応がしやすい	1歳児	公立	61.3	35.4	3.4	*	2.9	21.6	75.5	**
		私立	55.5	41.6	2.9		1.8	28.5	69.7	
	2歳児	公立	66.5	30.4	3.1	**	3.0	20.6	76.5	**
		私立	54.9	42.5	2.6		1.6	29.3	69.1	
18. 保育の準備がしやすい	1歳児	公立	88.2	10.9	1.0	**	2.0	10.0	88.0	**
		私立	81.2	17.8	1.1		1.8	15.9	82.2	
	2歳児	公立	87.2	11.8	1.1		1.9	9.7	88.4	**
		私立	84.4	14.9	0.8		1.7	16.8	81.6	
19. 指導計画の立案がしやすい	1歳児	公立	49.7	46.9	3.3	**	2.7	32.5	64.9	**
		私立	40.2	56.8	3.0		1.9	44.2	53.9	
	2歳児	公立	49.1	47.8	3.0	**	2.5	33.0	64.4	**
		私立	39.1	58.7	2.2		2.7	44.8	52.6	
20. 子育て支援の業務がしやすい	1歳児	公立	68.4	30.7	1.0	**	1.7	19.3	79.0	**
		私立	54.6	44.3	1.1		1.1	31.8	67.1	
	2歳児	公立	66.9	32.3	0.9	**	1.8	21.9	76.4	**
		私立	56.6	42.7	0.8		1.9	32.7	65.4	

＊ p<.05、＊＊ p<.01

本研究は、厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究」（主任研究者　民秋言）に基づくものである。

「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究」

民秋　言
白梅学園大学子ども学部子ども学科教授

1．研究目的

本研究の目的は、我が国の認可保育所における保育環境の実態を明らかにした上で、そのあるべき姿を提言することである。一般に保育環境は物的環境及び人的環境より構成される。物的環境には園舎、保育室、園庭、固定遊具、教材などがあるが、本研究では、特に保育室の広さに焦点をあてた。人的環境には職員、親、子ども、地域の人たちなどがあるが、本研究では、特に保育士の数に焦点を当てた。これらに焦点をあてた理由は、児童福祉施設最低基準（以下、『最低基準』と括弧書きとする）に、その数値が具体的に示されているからである。

2．研究方法

(1)文献研究、(2)実態調査、(3)比較調査を行い、(4)それらに基づいて提案を行うという４つの過程で構成した。平成19年度は、①物的環境に関する文献調査、②０、１、２歳児の保育室の使い方に関する実態調査（全国にある認可保育所の10分の１に調査票を郵送）、③０、１歳児の保育室の広さを操作した比較調査（保育室にＶＴＲを設置した観察調査及び聞き取り調査等）を行った。平成20年度は、①人的環境に関する文献調査、②保育士の業務に関する実態調査（10 カ所の保育所における保育士の業務の観察調査等）、③１歳児と２歳児の保育士の数の変化を想定した比較調査を行った（全国にある認可保育所の 10分の１に調査票を郵送）。平成21年度は、『最低基準』に関する文献調査、②『最低基準』に対する意識に関する実態調査（全国にある認可保育所の10分の１に調査用を郵送）、③保育室の広さ、保育士の数に関する保育士の担当年齢間の比較調査（全国にある認可保育所の20分の１に調査票を郵送）を行った。

3．研究結果及び考察

【平成19年度】

文献研究として、保育室の広さに関する基準について、国内外の文献を調べ、乳児の場合、一人あたり 3.3 ㎡は、国内だけでなく、国外においても標準的基準であることを明らかにした。実態調査では、３歳未満児の保育室内には、様々な備品が置かれていること、保育室が今よりも狭くなると、子どもにとっても、保育士にとっても様々なマイナス面や弊害が生じると保育士が認識していることなどが明らかになった。さらに比較調査として、０歳児と１歳児の保育室で過ごす子どもの数を操作することにより、一人あたり 3.3 ㎡と2.5 ㎡という保育室の広さの違いが子どもと保育士に及ぼす影響を比較して調べたところ、3.3 ㎡が、子どもにとっても保育士にとっても望ましいことが示された。

【平成20年度】

文献研究からは、①諸外国には様々な人的配置の基準があること、②我が国の人的配置基準の歴史的背景が明らかになった。実態調査からは、①保育士の業務内容が多岐にわた

っていること、②それらの業務は同時進行的に複雑に生じてくること、比較調査からは、①１歳児と２歳児に関して、今より保育士の数が減った場合、子どもと保育士の行動にマイナスの影響が出ること、②業務によって必要な人的配置の基準が異なることが示された。

【平成 21 年度】

文献調査では、最低基準を設けることの必要性が確認された。実態調査では、保育士は保育所の設備や運営に関して、最低基準による指定が必要であると考えていることが示された。比較調査では、①保育室の床の上に置かれている備品や保育室そのものの使い方が、０歳から５歳といった子どもの年齢によって異なること、特に３歳未満児と以上児では大きく異なること、②いずれの年齢を担当する保育士も、保育室が今より狭くなったり、保育士の数が今より少なくなったりすると、子どもの育ちにとってマイナスであると考えていることが明らかになった。さらに最低基準を踏まえた保育のチェックリストを提案した。

【総合考察】

19 年度の研究には、①保育室の面積の最低基準を考える資料、②保育室の使い方の工夫を促す資料、③保育室の設計や常設備品の開発のための資料、④保育や保育環境の評価方法を考えるための資料としての意義がある。20 年度の研究には、①人的配置基準を検討する最初のステップ、②業務内容のプロセス評価の足がかり、③業務内容に応じて養成・研修カリキュラムを構築する資料、④保育士のあらゆる業務に対するマニュアル作りための資料、⑤保育士の業務遂行にかかるチェックリスト作りとしての意義がある。21 年度の研究には、①園内で最低基準に関する研修を促す資料、②最低基準を踏まえて、よりよい保育を提供する手がかりとしての意義がある。

４．結論

本研究の目的は、我が国の認可保育所における保育環境の実態を明らかにした上で、そのあるべき姿を提言することであった。物的環境と人的環境に焦点をあてて、文献調査、実態調査、比較調査を３年間にわたり行った。その結果、現行の『最低基準』を、「子どもに対して保育を提供する上で、まさに最低の基準」と考える事が適切であり、この基準をゆるめることは、子どもの育ちにとってマイナスであること、この基準をさらに向上させていく必要があることが示された。

５．政策への反映

本研究は、児童福祉施設最低基準の第 32 条の設備の基準、第 33 条の保育士の数について最低基準を維持する必要性を明らかにしたものである。第３条の国及び地方公共団体が最低基準の向上に努めること、第４条の児童福祉施設（保育所）には最低基準の維持と向上義務が規定されていることから、国や地方公共団体には最低基準の遵守を義務づけるシステムと、保育所には子どもの育ちを保障する環境を意識して保育を行うシステムを作ることの必要性が示唆された。

次頁以降、平成２１年度に実施した調査の概要をスライドで紹介する。

平成21年度厚生労働科学研究政策科学推進研究公開シンポジウム
「子どもが健やかに育つ社会」

少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究

白梅学園大学
民秋　言

平成22年2月24日1330～1700 KDDIホール

1

目的

物的環境と人的環境に焦点をあて、保育所の実態とそれに対する保育士の捉え方を探ることで、児童福祉施設最低基準の批判的検証を行う

＜特に焦点をあてた環境＞

物的環境：保育室の広さ

人的環境：保育士の人数

2

方法

アンケート調査

全国の保育所の２０分の１に調査票を郵送

０～２歳児の担当者は各保育所３票

３～５歳児の担当者は各保育所１票

返送して下さった保育所は448カ所

（回収率は約40%）

3

備品が床の上にある割合（%）

	平均値
14. 机・椅子(ベビー用ラックを含む)	79.3
3. 子どもの個人用ロッカー	75.0
7. 遊具の収納棚	63.8
15. ピアノ・オルガン	61.5
⋮	⋮
12. 大人用のロッカー	9.9
9. おむつ交換台	7.9
10, 汚物などを入れる棚	6.3

4

部屋の使い方

主としてこの部屋を使う

	平均値
(4)衣服の着脱	95.9
(7)設定保育(主活動)等	94.7
(6)遊び	91.8
(1)食事	91.4
(2)睡眠	74.6
(5)清潔	55.6
(3)排泄	45.5

区切って使う（左のうち）

	平均値
(4)衣服の着脱	80.4
(7)設定保育(主活動)等	75.0
(1)食事	73.5
(6)遊び	71.7
(2)睡眠	71.5
(5)清潔	64.1
(3)排泄	30.0

5

保育室が狭いと感じる時間帯

		平均値
	時間帯の有無	53.4
狭いと感じる時間帯	4. 設定保育(主活動)等	53.2
	2. 午前の遊び	48.3
	7. 睡眠	40.9
	5. 食事(授乳を含む)	37.4
	3. 午後の遊び	32.9
	8. 着脱	17.6
	6. 排泄(オムツ交換を含む)	13.8
	1.. 登園(所)時の受け入れ	8.8
	9. 清潔(沐浴、清拭等)	8.4
	10. 延長保育時	7.9
	11. 降園(所)時の引き渡し	5.1
	12. その他	4.2

6

保育室が今より広くなるとすれば（子どもの行動）

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
4. 身体的活動がしやすい	80	19	1
14. 子ども同士のトラブルが少なくなる	41	52	7
2. 睡眠など適切な休息をとれる	41	57	3
10. 集中して遊ぶようになる	36	53	11
5. 聞く見る触れるなど感覚を使う機会が増える	35	63	2
8. 情緒が安定する	32	62	6
9. 機嫌がよくなる	31	67	2
11. 怪我が少なくなる	31	52	18
7. 周囲の人やものに興味・関心をもつ	25	71	4
3. 清潔を保つ行動が増える	22	75	3
15. 保育室から出ていかない	21	75	3
13. 子ども同士の関わりが多くなる	19	74	7
1. 食事を楽しむようになる	18	77	4
12. 子どもが疲れにくくなる	15	76	8
6. 発声、発語、会話が増える	13	83	5
16. 保育士への関わりが多くなる	10	83	7

40%以上の数値はポイントを上げて表示

保育室が今より広くなるとすれば（保育士の行動）

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
9. 設定保育（主活動）等がしやすい	63	33	4
13. 玩具・遊具など物的環境を管理しやすい	51	40	9
8. 遊びの援助がしやすい	51	43	7
18. 保育士が動きやすくなる	41	52	7
5. 睡眠の援助がしやすい	34	60	6
4. 食事の援助がしやすい	30	61	9
14. 安全管理をしやすい	30	50	20
7. 着脱の援助がしやすい	29	65	6
15. 保育士のストレスがたまらない	25	71	4
6. 清潔の援助がしやすい	23	71	6
19. 保育室以外で保育する機会が少なくなる	20	76	4
3. 排泄の援助がしやすい	20	71	10
2. スキンシップをとりやすい	16	71	13
12. 温度・湿度の管理がしやすい	15	67	18
16. 保育士が疲れにくくなる	15	76	8
17. 保育士の口調が柔らかくなる	13	80	7
10. 言葉かけがしやすい	10	72	18
1. 健康状態の把握がしやすい	7	79	14
11. 保育士同士の会話がしやすい	5	80	15

8

保育室が広い（もっと狭い方がよい）と感じる時間帯

		平均値
	時間帯の有無	8.8
広いと感じる時間帯	4. 設定保育（主活動）等	33.8
	2. 午前の遊び	30.6
	7. 睡眠	29.6
	3. 午後の遊び	28.3
	5. 食事（授乳を含む）	22.3
	1. . 登園（所）時の受け入れ	15.7
	8. 着脱	14.2
	6. 排泄（オムツ交換を含む）	13.5
	10. 延長保育時	11.6
	9. 清潔（沐浴、清拭等）	11.0
	11. 降園（所）時の引き渡し	11.0
	12. その他	2.8

9

保育室が今より狭くなるとすれば（子どもの行動）

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
4. 身体的活動がしやすい	1	8	91
2. 睡眠など適切な休息をとれる	1	23	76
14. 子ども同士のトラブルが少なくなる	3	22	75
11. 怪我が少なくなる	4	28	67
9. 機嫌がよくなる	1	32	67
8. 情緒が安定する	2	32	66
1. 食事を楽しむようになる	1	42	57
10. 集中して遊ぶようになる	4	39	57
15. 保育室から出ていかない	2	44	54
12. 子どもが疲れにくくなる	4	46	50
5. 聞く見る触れるなど感覚を使う機会が増える	2	48	49
3. 清潔を保つ行動が増える	1	49	49
7. 周囲の人やものに興味・関心をもつ	6	62	33
13. 子ども同士の関わりが多くなる	13	55	32
6. 発声、発語、会話が増える	5	66	29
16. 保育士への関わりが多くなる	11	63	29

保育室が今より狭くなるとすれば（保育士の行動）

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
9. 設定保育（主活動）等がしやすい	2	21	76
8. 遊びの援助がしやすい	4	34	62
18. 保育士が動きやすくなる	4	37	59
15. 保育士のストレスがたまらない	2	41	58
13. 玩具・遊具など物的環境を管理しやすい	5	39	56
19. 保育室以外で保育する機会が少なくなる	9	36	55
5. 睡眠の援助がしやすい	3	43	54
14. 安全管理をしやすい	8	42	51
4. 食事の援助がしやすい	4	46	50
7. 着脱の援助がしやすい	3	48	49
16. 保育士が疲れにくくなる	2	51	47
6. 清潔の援助がしやすい	3	54	43
17. 保育士の口調が柔らかくなる	2	59	39
3. 排泄の援助がしやすい	25	58	38
12. 温度・湿度の管理がしやすい	10	60	30
10. 言葉かけがしやすい	13	62	25
2. スキンシップをとりやすい	13	62	25
11. 保育士同士の会話がしやすい	10	70	20
1. 健康状態の把握がしやすい	11	69	20

11

忙しい活動（%）

	平均値
7. 食事（授乳を含む）の援助	58.6
14. 連絡帳の記入など記録	31.3
17. 保育中の掃除・片づけ	25.5
10. 排泄の援助	25.5
2. 登園（所）時の子ども対応	23.7
11. 着脱の援助	21.4
6. 設定保育（主活動）等	19.7
16. 降園（所）時の保護者対応	19.1
3. 登園（所）時の保護者対応	15.5
12. 清潔（沐浴、清拭等）面の援助	15.2
9. 睡眠の援助	13.0
15. 降園（所）時の子ども対応	12.2
4. 午前の遊び	10.8
8. おやつの援助	6.4
18. 降園（所）後の掃除・片づけ	5.6
13. 延長保育への引き継ぎ	5.2
5. 午後の遊び	4.0
1. 登園（所）前の掃除・片づけ	3.7
19. その他	6.7

12

保育士が不足している（もっと多い方がよい）と感じる時間帯

		平均値
	時間帯の有無	65.6
保育士不足と感じる時間帯	7. 食事(授乳を含む)の援助	52.9
	6. 設定保育(主活動)等	31.1
	10. 排泄の援助	30.0
	17. 保育中の掃除・片づけ	29.9
	2. 登園(所)時の子ども対応	29.2
	11. 着脱の援助	26.6
	14. 連絡帳の記入など記録	24.5
	3. 登園(所)時の保護者対応	23.8
	16. 降園(所)時の保護者対応	23.7
	12. 清潔(沐浴、清拭等)面の援助	23.6
	4. 午前の遊び	23.4
	9. 睡眠の援助	21.9
	15. 降園(所)時の子ども対応	20.4
	5. 午後の遊び	15.8
	18. 降園(所)後の掃除・片づけ	11.9
	8. おやつの援助	11.1
	13. 延長保育への引き継ぎ	10.2
	1. 登園(所)前の掃除・片づけ	7.0
	19. その他	6.8

保育士が今より多くなるとすれば（子どもの行動）

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
16. 保育士への関わりが多くなる	77	22	1
11. 怪我が少なくなる	69	29	2
6. 発声、発語、会話が増える	69	30	1
8. 情緒が安定する	67	31	2
5. 聞く見る触れるなど感覚を使う機会が増える	62	37	1
4. 身体的活動がしやすい	61	37	2
3. 清潔を保つ行動が増える	59	40	1
1. 食事を楽しむようになる	58	40	2
14. 子ども同士のトラブルが少なくなる	57	40	2
7. 周囲の人やものに興味・関心をもつ	56	43	1
9. 機嫌がよくなる	54	44	2
2. 睡眠など適切な休息をとれる	47	51	2
10. 集中して遊ぶようになる	45	53	3
15. 保育室から出ていかない	38	60	2
13. 子ども同士の関わりが多くなる	30	61	9
12. 子どもが疲れにくくなる	25	73	1½

保育士が今より多くなるとすれば

保育士の行動に及ぼす影響

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
19. 保育の準備がしやすい	83	15	2
8. 遊びの援助がしやすい	81	17	2
4. 食事の援助がしやすい	81	17	2
2. スキンシップをとりやすい	77	19	3
14. 安全管理をしやすい	76	23	2
6. 清潔の援助がしやすい	76	23	1
1. 健康状態の把握がしやすい	75	22	3
3. 排泄の援助がしやすい	75	24	2
7. 着脱の援助がしやすい	74	24	2
5. 睡眠の援助がしやすい	74	25	2
25. 研修時間が取りやすい	73	25	2
9. 設定保育(主活動)等がしやすい	73	25	2
24. 連絡帳等が書きやすい	69	29	2
13. 玩具・遊具など物的環境を管理しやすい	63	36	1
18. 保護者への対応がしやすい	62	34	4
23. 保育の記録が書きやすい	61	36	3
21. 子育て支援の業務がしやすい	59	39	2
10. 言葉かけがしやすい	59	38	3
20. 指導計画等の立案がしやすい	51	46	3
16. 保育士が疲れにくくなる	49	47	4
22. 保育士同士の連携がしやすい	40	48	12
17. 保育士の口調が柔らかくなる	39	59	2
15. 保育士のストレスがたまらない	39	54	7
12. 温度・湿度の管理がしやすい	34	65	1
11. 保育士同士の会話がしやすい	34	60	6

保育士が今より少なくなるとすれば（子どもの行動）

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
11. 怪我が少なくなる	2	15	83
8. 情緒が安定する	2	19	79
4. 身体的活動がしやすい	2	22	76
3. 清潔を保つ行動が増える	1	24	75
14. 子ども同士のトラブルが少なくなる	3	23	75
1. 食事を楽しむようになる	1	26	73
9. 機嫌がよくなる	2	26	73
2. 睡眠など適切な休息をとれる	1	29	70
16. 保育士への関わりが多くなる	6	24	70
5. 聞く見る触れるなど感覚を使う機会が増える	2	30	68
6. 発声、発語、会話が増える	2	31	67
10. 集中して遊ぶようになる	2	34	64
15. 保育室から出ていかない	1	38	61
7. 周囲の人やものに興味・関心をもつ	2	39	60
12. 子どもが疲れにくくなる	1	44	55
13. 子ども同士の関わりが多くなる	9	44	47

保育士が今より少なくなるとすれば

保育士の行動に及ぼす影響

	文のようになる	今と変わらない	文とは逆の結果となる
4. 食事の援助がしやすい	2	11	87
8. 遊びの援助がしやすい	2	12	86
9. 設定保育(主活動)等がしやすい	2	14	84
6. 清潔の援助がしやすい	2	15	84
19. 保育の準備がしやすい	2	14	83
3. 排泄の援助がしやすい	2	15	83
7. 着脱の援助がしやすい	2	15	83
5. 睡眠の援助がしやすい	2	15	83
14. 安全管理をしやすい	2	17	81
25. 研修時間が取りやすい	2	18	80
2. スキンシップをとりやすい	3	17	80
1. 健康状態の把握がしやすい	3	18	79
24. 連絡帳等が書きやすい	2	21	77
16. 保育士が疲れにくくなる	2	21	77
18. 保護者への対応がしやすい	2	23	74
21. 子育て支援の業務がしやすい	1	26	72
23. 保育の記録が書きやすい	2	26	72
15. 保育士のストレスがたまらない	2	26	71
10. 言葉かけがしやすい	2	27	71
13. 玩具・遊具など物的環境を管理しやすい	2	29	69
20. 指導計画等の立案がしやすい	2	32	66
17. 保育士の口調が柔らかくなる	1	34	64
22. 保育士同士の連携がしやすい	6	33	62
11. 保育士同士の会話がしやすい	3	40	57
12. 温度・湿度の管理がしやすい	1	47	52

まとめと提言

設備（面積）や保育士の数に関しては、現行の最低基準を維持することが必要である。

国や地方公共団体には最低基準の遵守を義務づけるシステムを作ること、保育所には最低基準を意識して保育を行うシステムを作ることの必要性が示唆された。

18

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策推進研究事業））

「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究」

（H19-政策--一般-017）

平成19年度～平成21年度

総合研究報告書

主任研究者

民秋　言　　白梅学園大学　教授

分担研究者

西村　重稀　　仁愛大学　教授

高野　陽　　北陸学院大学　教授

吉岡　眞知子　　東大阪大学　教授

成田　朋子　　名古屋柳城短期大学　教授

河野　利津子　　比治山大学　教授

清水　益治　　帝塚山大学　教授

佐藤　直之　　京都女子大学短期大学部准教授

（平成21年9月10日寂）

千葉　武夫　　聖和短期大学　教授

森　俊之　　仁愛大学　准教授

川喜田昌代　　玉成保育専門学校　講師

鈴木　岩雄　　名古屋芸術大学准　教授

水上　彰子　　富山福祉短期大学　専任講師

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）

「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究」

（H19-政策-一般-017）

平成 19 年度～平成 2 1 年度

総合研究報告書

主任研究者　民秋　言　白梅学園大学

〒187-8570　東京都小平市小川町 1-830　℡042-342-2311